

ノモンハン戦記

宮城県 浮津菊夫

北上川の河口付近の山間地に居住する浮津家の男四人、女三人の農家の長男として生を享けました。大川尋常高等小学校卒業後、農業に従事する傍ら青年学校四年間の課程を卒業、昭和十二（一九三七）年八月、実施された徴兵検査では試験官より見事に甲種合格を言い渡された時の嬉しさ、男子の本懐これに過ぎるものなしと、今でもあの時の心境を思い浮かべることがあります。

昭和十四年二月十三日、広島集合の令書が下り、当地では出征兵士を送る壮行会が大川小学校の校庭で催されました。村長さんをはじめ村の有志の方々や、部落を挙げての盛大な壮行会で、村長さんよりは激励の言葉を賜り、一緒に行く友人と無我夢中のうちに「元気で皇国のためにご奉公して参ります」と答辞を述べました。

終わると北上川の船着場より「鈴吉丸」と言う船に乗り、四時間ほどにて石巻に到着、仙石線で仙台に出て、ここからは引率者に同行されました。どこにも行つた事もない私のような田舎者には物珍しいものばかり、その内広島に到着し早速、旅館で軍服に着替えさせられました。二等兵の肩章に責任の重さを感じました。

二日ほどして宇品港を出港しました。これで故郷の山河も見納めかと感慨ひとしおでした。行先はどこかも分からずの日程で清新港に上陸し、ここからは列車にて鮮満国境を通過、二十五日に満州三江省富線に到着、第八〇七部隊栗本隊に入隊しました。

初年兵教育が始まり実科に学科に、また、内務班の厳しい古年兵の教育と、心の休まる暇もない毎日、特に満州の酷寒に耐えながらの毎日でした。かくして何とか三カ月の一期検閲も無事終了しホッとした八月に一等兵に進級、心身ともに軍人としての自信を持ったのです。その矢先ノモンハ

ン事変が勃発し、この戦線への参戦の出動命令が発せられました。

富線を出発、平陽鎮に到着し、これから過酷な三カ月の激戦に突入したのですが、輸送路が絶たれたのか食糧も無くなり、また水も無く、ソ連との国境ではほとんどの兵士が病気に罹り、中には肺結核や肋膜炎の重症患者もいました。幸い自分は軽症であったので軽機関銃の射手として低空で爆撃に来たソ連機を十機以上撃墜したことは信じ難い事実であります。

程なく戦場より原隊復帰し、医務室にて手当をしてもらった程度で済みました。その功績が評価されたのか二週間ほどの休暇を頂き、疲れを休めることができたところです。

間もなく栗木隊長は少佐に任官され連隊副官となり、以来自分は二年余りを副官の従卒として務めました。副官が方々に出張する時や勤務中の諸連絡にと忙しく務めました。とくに出張の時は乗馬を使われるのでその世話もしておりました。

日時の記憶は定かではありませんが、牡丹江出張に随行した折飛行機を利用したときでした。操縦手と予定されていた機銃手がにわかには調子が悪いとかで私は代役として機乗したのです。我々の飛行機は国籍不明の二機に襲われたのですが、この時、ノモンハンでの感を取り戻し見事に撃墜して重責を果たしました。着陸してから操縦手になりがとうと抱きつかれたときの思い出が今でも鮮明に頭に浮かびます。

昭和十五年三月、支那事変従軍記章並びに勲八等瑞宝章を授与され、同年五月上旬上等兵に進級、同十六年一月、除隊のため平陽鎮を出発、宝清に到着、同十七年五月、東安省宝清を出発、十二日鮮満国境通過、十五日釜山港出発、十七日宇品港に上陸、列車にて青森に向いました。途中B 29による新津並びに東京が爆撃された所も目撃したことも秘密にこのことでした。

そして満人より購入した使い慣れた軽機関銃と栗木副官より頂戴した軍刀を大事に持ち、五月二

十日、無事に弘前第二十部隊を除隊しました。こ
んどは逆方向に仙台より乗り継ぎ、家族の待つ故
郷に喜びの笑顔で迎えられました。

早速三年ほど鍛えてこられた軍人精神を青年学
校の生徒に是非教育して欲しいとの要請を受け入
れ、恩返しとして青年学校の教官として頑張っ
ていたところ終戦となりこの努力は無駄になったの
です。

除隊時に持ち帰った軽機関銃と軍刀は許可なく
所持出来ないとのことで、折りよく終戦直後に兵
機係をしていた曹長さんが、富山県の黒部で旅館
を営む傍ら七階で宝物殿を所有しているとのこと
で、ここでの収蔵を心よく承諾して頂きました。
そこには甲冑類等を始め多くの珍品が飾られてい
ましたので仲間入りさしてもらい一安心しました。
程なく縁談がありまして近所から妻を迎えるこ
とが出来、子供も授かりました。戦後は農業だけ
では生計を立てる事が出来ないので出稼ぎをする
など、生活は大変でしたが、年を経るに従い子供

たちも働くようになり、時折曾孫が顔を見せに来
る幸せな毎日を送らせていただいております。

九十の過ぎし歲月をおぼろげながら思い浮かべ、
幸せな毎日を送るに付け、ノモンハンにおける戦
で不運にも戦死あるいは病魔に倒れ、遠い故郷に
思いを馳せながら帰らぬ人となった、その戦友の
方々に思いを馳せた時、戦争はあつてはならない
ことを堅く誓い、若い世代に語り伝えねばとの思
いで生き長らえております。